審査の報告の要旨

氏名　于　臣

本論文は、幕末から昭和期まで活動し、日本資本主義の発展に尽力した渋沢栄一の思想を通じて、近代化に対応した儒学の適応・修正という問題を検討した研究である。ウエーバーが問題としたような資本主義の「精神」という観点から見たとき、アジア・日本の場合、儒学がまず阻止要因として存在したと考えられる。すなわち儒学の中心思想の一つ「義利の弁」は、道義をさす「義」を重んじ、功利、特に私利を指す「利」を軽んじることを特徴とし、農業重視・商業軽視の職業観をもたらした。幕末に豪農として儒学教育を受けて成人した渋沢は、その後資本主義の発展を担う中でことあるごとにこの「義利の弁」の葛藤に直面した。本論文はその葛藤を詳細に追求して描き出すと共に、日本におけるその葛藤がどのような意味を有するか、中国でしばしば渋沢と対比される張謇（ﾁｮｳｹﾝ)を取り上げて比較し、その特質を明らかにするという方法をとった。

第一章では、渋沢の少・青年期の環境、学問履修に即して思想形成過程を検討する。第二章で、『論語』の読み直しから生まれた渋沢の＜義利＞観について考察し、朱子学への批判に基づく＜義利合一＞論を取り上げる。第三章では、渋沢の実業活動における＜義利＞観を取り上げ、「官尊民卑」の打破、商工業者の地位の向上を課題としていたとする。また資本家として終生慈善事業にも関わった彼の労資問題観、慈善思想についても検討し、彼のとなえた「王道」思想は、当時の資本家、富豪の立場を代弁するものとみている。第四章において、東京高等商業の昇格問題を中心に教育問題における渋沢の＜義利＞観を考察する。以上をふまえ、義利論、実業観、教育観について張謇の言説をも検討し(第五章～第八章)、両者の＜義利＞観における「公」の性格の相違を指摘する(終章)。渋沢に於いては国家を中心とする「公」観が資本主義の発展に資することになったが、張における「公」は郷土志向から脱することが出来なかった。日本の工業化にも功罪両方あるとする立場から、両者の「公」観の相違について、現在もなお工業化が課題であるアジア諸国における「公」観の様々な可能性を示唆するものと位置づけている。

渋沢の主要な資料は関東大震災ですべて焼失したため、その後断片的な資料を集めた３０巻（６８冊）の『渋沢栄一伝記資料』が編成された。この浩瀚な資料をもれなく読んで彼の思考を集積すると共に、古い中国語が使われていて難解な『張謇全集』をも丁寧に渉猟して両者の思想を構成するという膨大な作業のもとに本論文は成り立っている。さらに思想家であるより経済人であった渋沢の思想の意味を読み解くために、関連する大量の文献にあたっていることがよくわかる論文である。本論文は東アジアが近代化において共通して抱えてきた儒学の阻害的要因をどうとらえ、さらに資本主義形成を担う国民意識の問題にどうつなげるか、またそこにおける教育の意味の違いなどという大きな問題に踏み込んでおり、問題の大きさ、研究方法の魅力、そしてそれをともかくやり遂げた、スケールの大きい、意義ある論文であるという点で委員会は一致し、博士（教育学）の称号にふさわしい論文と判断された。